

いま・ここで創られる地域学

- 2023 年度鳥取大学地域学部地域学総説の現場から -

稲津秀樹*・岡村知子*・白石秀壽*・石山雄貴*

Creating Regional Sciences:
Reviewing the 2023 Tottori University Regional Sciences Program

INAZU Hideki*, OKAMURA Tomoko*, SHIROISHI Hidetoshi*, ISHIYAMA Yuki*

キーワード：地域学, 学際性, 超学際, 交錯する知, 気づき

Key Words: Regional Sciences, Inter-disciplinary, Trans-disciplinary, Crossing Knowledge Boundary, Awareness

I. はじめに

本稿の目的は、鳥取大学地域学部が開講する地域学総説の講義内容を手がかりとしつつ、地域学の探究に向けたヒントとなる知見を提出することにある。地域学総説は、1 年次必修の地域学入門と同様、ゲスト講師・学生・教員の「知」を交錯させながら（超学際）、地域学を創るための講義として設計されている。本学部の3 年生以上が履修する地域学総説は、2019 年度より必修科目である「地域学総説 A」と、選択科目である「地域学総説 B」を主に構成されるようになった。新入生が地域学の視点を学ぶ「入門」に対し、「総説」は専門知を学ぶ専門ゼミ段階の学生たちと改めて、地域とは何か／地域学とは何かを問い、これまでの地域学の議論に新たな知見を加えるチャレンジを行うことに、その特徴がある。

2019 年度のカリキュラム改編以降、担当コーディネーターとコース担当教員、ほか関連教員を中心に、講義最終回の内容をもとに地域学が創られる「いま・ここ」の瞬間にフォーカスを当てた講義録を発表してきた（村田ほか 2020；稲津ほか 2022；白石ほか 2023）。本稿もその流れに位置づけられるものであるが、今回は講義録そのものではなく、学期終了後にコーディネーターと担当教員が、講義内容を省察、総括し、講義の知見を新たに整理した論考である点で、これまでの記録集とは趣を異にしている。

では、2023 年度の地域学総説は、どのような流れの下に、何が企図され、どのようなテーマが設定されたのか。既存記録でも発表してきた通り、新型コロナウイルスの世界的流行の影響を受けつつ、私たちが近年検討してきたテーマは「つなぐ・つながる」であった。このテーマを考えたとき思い起こされるのは、書籍『地域学入門』のサブタイトルである「〈つながり〉を取り戻す」である。国民国家を中心に組織化された近代社会の構造的な枠組み（制度）が、さまざまな諸要因により大きく変化し、人間にとっての確かなものが見失われる中、近代国民国家が抑圧してきた人びとの生活、あるいは「わたし」という一人の人間の視点から、「つながり」を取り戻すというテーマこそが、『地域学入門』に示された地域学の探究課題であった（柳原ほか 2011）。

言い換えれば「想像の共同体」（Anderson 1983=1991）としてイメージされた国民国家の下での「つながり」ではない、これからの時代の希望となる、もうひとつの人びとの「つながり」を、私・私たちの暮らしの場からイメージすることが、2020 年度地域学総説において示した「想像力としての地域学」の方向性であった（村田ほか 2020）。

では、この「つながり」に今、何が起きているのか。新型コロナウイルスの流行は、リモートワークやオンライン講義など、デジタル社会への移行を強力に推し進める要因となり、時間と空間の制約から解き

*鳥取大学地域学部

放たれる私たちの「いま・ここ」は、いつでも／どこかの／誰か／何かとつながっていられる社会へと着実に変化している。実際、2020年度の地域学総説も、他大学の講義と同様、新型コロナウイルスの流行を背景に、過去の講義動画のアーカイブ配信を中心とするリモート講義で構成されることになった。

このときの講義経験をもとに、私たちは「つなぐ・つながる」というテーマを掲げ、2021年度・2022年度の地域学総説A・Bを構成してきた。それは本学の地域学の特徴である「〈わたし〉の〈いま・ここ〉からの視点」を批判的に継承しながら、私・私たちの暮らしの場である地域が、新型コロナウイルスとの共棲に象徴される変化を受け入れ、向き合おうとする人びとの構えとは何かを考えてきた。

この構えを捉えるときに重要なのは、コロナショックに限らず、私たちが周囲の状況に応じて自らの暮らしの場を創造し続ける営みを、外的かつ静的なものとして捉えないことである。人びとが「つながり」なおす営み、つまりは「つながり」の再創造の結果だけを表層的に論じるのではなく、これを内的かつ動的な変化の過程として理解しなおすことが求められる。これを学問的に捉えるために、「地域の知」を構成している人びとの「しろうと理論」との「対話の場としての地域学」の重要性が提起されてきた(白石ほか 2023)。

2023年度地域学総説のテーマも、これまでの講義の蓄積の上に構想されたものである。ひとつが「変わるものと変わり得ぬもの」(総説A)、もうひとつが「伝えることの(不)可能性」(総説B)である。これらは別々のテーマではなく、「つながり」なおしの場における変化を内的かつ動的に考え、対話的に捉える際に問われる課題を示したものである。

まず、上述の通り、「つながり」を内的かつ動的なものとして捉え直したとき、誰か／何かと「つながり」なおす過程で起きている「変化」をどのように認識し、考えるのか、という課題が浮上する。そのときの仮説として、私・私たちの暮らしの場が再創造される際に生まれる変化もあれば、変化に晒されても変わり得ないものがあることが想定されるだろう。

このとき担当者(稲津)の念頭にあったのは、初回の講義で紹介した阪神・淡路大震災の追悼式(東遊園地で開催される「1.17のつどい」)におけるメッセージボードの場であった。追悼会場に置かれたテントに貼られた白幕には、追悼式を訪れた人の誰もがカラーペンで書き込みできるようになっている。じきに発災から30年を迎えることになるが、ここで震災を追悼しているのは誰なのか／ここでは何が追

悼されているのかを問うとき、講義では10年以上、このボードの前に佇むことで見えてきた追悼場の変化を紹介した。まず、そこでは1995年1月に地震を直接体験した「被災者」に限らない、多様なアクターが、震災追悼に関わりながら「つながり」なおす様を確認することができた(稲津 2017)。また、震災追悼の場に集う人びとの社会関係は変化しつつも、「魂」のように追悼される対象は変わり得ぬ存在として構築されていることが、メッセージボードという「もの」に見て取ることができた(稲津 2019)。このように「変わるものと変わり得ぬもの」というテーマの下、身近な暮らしの場における「つながり」の再創造の動態を、人間(=生者)以外の「もの」との「つながり」にも注目して明らかにしていくことを、2023年度の総説Aの課題とした。

総説Bは、Aで探究した「もの」との「つながり」というテーマは論点のひとつとしながら、「つながり」を取り戻す際に起きている変化を、より切実な問題状況において問いなおし、深めることを目的とした。生きづらさを抱えた子ども、夜間中学で学ぶ人びと、戦争状況を生きてきた元兵士など、制度と生活の狭間の社会問題の現場における、人びとの「つながり」なおしを模索する活動(つながりの再創造の動態)に学ぶべく、テーマ設定を行った。

こうした社会問題の現場に学ぶことは、地域学を構想する上において大変重要となる。というのも、私たちが他者の問題と「つながり」なおすにあたっては、これを消費する構えに終わることなく、自らにとっての問題も他者に伝えられるようになること—つまり、互いが互いにとっての他者として、自らにとっての切実な課題を伝え合える、当事者同士の関わりに入っていくこと—が、当事者研究の流れも踏まえた地域学の在り方に求められているからだ(向谷地ほか 2022)。このように「つながり」を取り戻す人びとの方法を探究するため、総説Bには「伝えることの(不)可能性」というテーマを設定した。

「つながり」なおしの過程において、他者の課題は、わたしという自己(自ら)をめぐる課題へと常に反転しながら、他者と自己とのあいだの「つながり」なおしは遂行される。『地域学入門』において「内省／反省の学としての地域学」、あるいは地域学における「わたしからの視点」といった議論がなされたように、これは市井の人びとというよりは、大学に属するような専門家の立場にこそ問われている課題だろう。社会問題から地域学を構想する際の観点として提起された、「内省／反省」する「わたし」を介して地域を捉える視点の、より詳細な検討が求められる(仲野

2011).

そこで、総説Aでは「女性」というジェンダーの論点を、総説Bでは「制度と生活のはざま」という境界領域をサブテーマとしてそれぞれ設定した。これらは、他者との対話を通じた自己の反省という「つながり」なおしの変化を探究する上で、権力というバイアス（「つながり」なおしの在り方に影響を与える要因）を考慮するためである。具体的には、男性中心社会の中で、周辺におかれがちな女性の立場から見えてくる「つながり」なおしの在り方は、男性というジェンダーを生きる人たちにとってのそれとは異なることが考えられる。また、私・私たちの暮らしの場は、それ自体、生活としてのみ存立しているわけではない。冒頭に述べたように、それは近代の国民国家をはじめとする諸制度との緊張関係の下に成立している。これらの条件を考慮に入れた上で、人びとが「つながり」を取り戻す際の「変化」を問い直すことから、地域や地域学に関する考察を深める。以上が、2023年度地域学総説のテーマに込めた企図である。

以下では、2023年度の地域学総説A・Bの講義ゲストと講義概要を紹介した後(Ⅱ)、担当教員が講義から得た地域の知をめぐる学びを記す(Ⅲ)。最後に、2023年度の地域学総説を通じて得られた気づきを、受講学生によるレポートを紹介しながら(Ⅳ)、まとめにかえて記したい(Ⅴ)。(稲津秀樹)

Ⅱ. ゲスト講師と講義概要

今年度の「地域学総説」各回の登壇者、および講義タイトルは、以下の通りである。

《地域学総説A》

「変わるものと変わり得ぬもの——地域をつくる「女性」から学ぶ」

第1回：稲津秀樹・岡村知子

「イントロダクション」

第2回：米田真理子

「創作する人生——つくり続けるための原動力を問う①」

第3回：山口邦子（染色家）

「創作する人生——つくり続けるための原動力を問う②」

第4回：西山美彩子・柴田千穂・鈴木ひとみ（藍染工房ちずぶるー）

「“自分が、人が、どう生きたいのか”に寄り添う」

第5回：平田明子（ひらた蓬の会代表者）

「地域に伝わる文化をつなぐ——島根県出雲市平田

町の「平田一式飾り」

第6回：白石秀壽

「変わることが残すこと——中小企業の事業転換」

第7回：益山明子（MASUYAMA-MFG 株式会社代表者）・三浦政司（宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所宇宙飛行工学研究系准教授）

「鳥取市内にある部品加工会社から、宇宙産業へ」

第8回：稲津秀樹・岡村知子・白石秀壽・石山雄貴・高橋健司

「総説A」のまとめ、「総説B」への接続」

《地域学総説B》

「伝えることの（不）可能性——制度と生活のはざま」

第9回：菰田レエ也

「野生の官僚:当事者の自治に基づく地域デザインの可能性①」

第10回：小池達也（よだか総合研究所・政策デザイナー）

「野生の官僚:当事者の自治に基づく地域デザインの可能性②」

第11回：石山雄貴

「私なりの地域との向き合い方について」

第12回：黒川優子（鶴見橋よみかきありがとうの会・元夜間中学校教員）

「学ぶ・つながる——映画「こんばんはⅡ」の世界から問いなおす」

第13回：稲津秀樹

「出来事を伝えることの（不）可能性——あるいは、わたしからの応答（不）可能性について」

第14回：ダニー・ネフセタイ（家具作家）

「国のために死ぬのはすばらしい？——イスラエルからきたユダヤ人家具作家の平和論」

第15回：稲津秀樹・岡村知子・白石秀壽・石山雄貴・高橋健司

「総説A・B」のまとめ」

様々な分野で活躍される外部講師を複数名お招きする本講義は、学生が講義内容を予備知識なしに聴き、未消化のまま次の回を迎えるという問題が生じていたため、今年度は可能な限り、教員が自らお招きした外部講師の講義に対する事前授業を行うことで、学生の学びが深まるような講義構成を心がけた。

第2・3回は、米田真理子教授から、「型染め」という染色技法についての基礎知識や、民芸の系譜についてのレクチャーを受けた上で、染色家・型染め作家である山口邦子氏をお招きした。山口氏は、「芸術

による女性の自立」を建学の理念とする女子美術大学において、柳悦孝や柚木沙弥郎の教えを受け、染色の道に進まれた。卒業後、鳥取に帰郷すると、型染めの教授への対価がカルピス4本であったというエピソードに象徴されるような、地域社会の芸術に対する無理解に直面された。しかし、柚木氏との師弟の絆を支えに、自己の内発的動機や適性に忠実に型染めを極められ、ご家族や地域の人々の理解を得て来られたことは、「芸術文化活動への関与が、自分自身や自分の人生に対する深い理解や、他者への尊重と共感、多様な経験や文化への感謝など、個人に内省を促すのに役立つ」(Geoffrey Crossick and Patrycja Kaszynska 2022) ことの証左と言える。

山口氏が、作品制作の工程を全て一人で担われるのに対し、仕事への価値観を共有する女性たちが協働して藍染めを営むグループとして、第4回にお招きした「藍染工房ちずぶるー」がある。ちずぶるーは、「智頭に新たな特産品を」という石谷家(近世期に大庄屋を務めた名家)の呼びかけに応じた女性たちによって、2005年に立ち上げられ、後継者に志願した西山美彩子氏らが2020年に継業した。種から育てた蓼藍の葉を手作業で選別し、智頭に流れる清冽な水を用いることで発色する澄んだ藍色を“変わらぬもの”として継承しつつも、品質を左右しない雑務を合理化し、価格を適正化することで、持続可能な企業体へと移行させた。月給5万円で、誰もが精神的に追い詰められることなく、子どもをそばにおいて働ける環境を維持することは、利潤のみを追求し格差を再生産する資本主義社会に対する、抵抗のかたちたり得ていると言えるだろう。

第5回では、対価を得るという発想から断ち切れたところで営まれる一式飾りについて、平田明子氏からお話を伺った。長年にわたり、一式飾りの研究に取り組まれている高橋健司教授によれば、島根県出雲市平田町に伝わる「平田一式飾り」は、1793(寛政5)年に、表具師・桔梗屋十兵衛が平田天満宮の神慮を慰めるため、茶器一式で作った飾りを奉納したことに始まる(高橋 2021)。戦後は「平田一式飾り保存会」(1952年結成)によって、陶器一式を龍などの伝統的なモチーフに見立てる営みが続けられてきたが、平田氏が気心の知れた女性たちと2005年に立ち上げた「ひらた蓬の会」は、キッチングッズ一式をピカソの「ゲルニカ」に見立てて平和への祈りを表現するなど、同時代の社会的な問題にコミットする作品作りが意識されている。未だ男性が中心である一式飾り継承の現場(平田氏も伯父の大島庄八氏から技術を学んだ)では、平田氏らの作品は正当に評価されにくいというが、そうした力学が“虐げられる者への眼差し”を作品に取り込む原動力となっているよ

うに思われる。

第6回では企業の事例に戻り、白石秀壽准教授から、「科学的理論」と「しろうと理論(市井の人々の知)」の対話・融合の必要性や、ダイナミック・ケイパビリティ論(変化に対応するために、内外の資源・能力を再構築し続ける高次の組織能力)に基づく企業の主体的変化についての説明があった。続く第7回において、益山明子氏が代表を務める部品加工会社が、米中貿易摩擦やコロナ禍に起因する経営危機を、技術の洗練化とデジタル化、医療機器分野や宇宙産業への参入によって乗り越えられた軌跡について語っていただき、私たちが心揺さぶられることは、まさに「しろうと理論」との対話の時間であったと言える。その理論が練り上げられていった過程には、部品加工業界に女性経営者が少なく、軽んじられる実態があることも影響を与えているだろう。また、宇宙産業は国防に直結する分野である故に、国内の中小企業にも参入のチャンスが開かれているわけだが、宇宙開発と防衛の関係をどのように認識し、その隘路にコミットするかは、有権者および納税者である私たち一人一人の問題でもあることを、JAXAの研究員である三浦政司氏は強調された。

このように総説Aでは、男性が中心となって営まれてきた業界や地域社会の歪み・偏りを、女性がもの作りを通して是正するようにして、作品・製品に内在する新たな価値が生み出されるダイナミズムを看取することができたように思う。

続く総説Bでは、ジェンダーやセクシュアリティに規定された自己について内省することから始めて、身近な他者との、さらには物理的距離やイデオロギーによって隔てられた他者との対話を開始する方途を、もの・文字・制度といった媒介物に留意しつつ模索する流れを意識した。

第9回において菰田レエ也講師は、“特別な人がどう生きたか”に学ぶだけでなく、“普通の人かがどう生きるか”を自分の問題として追究する学問が地域学であり、それは受講生一人一人がこれから取り組む卒業研究にも通じるものであると伝えられた。第10回には、そのように自他の足元に視点を据えて、“当事者による自治”をサポートされている「よだか総合研究所」の小池達也氏をお招きした。小池氏は、地縁のない岐阜県揖斐町において、困り事・悩み事を抱える住民を対象に、相談窓口を開設し活動資金を拠出、生活に根差した問いを共有し学び合うための市民大学・よだかの学校を立ち上げゼミを企画されている。よだか総研から出版された『息の詰まりそうな子どもと立ちすくむ大人のマガジン』(2022年)

には、社会を成り立たせる4つの秩序（行政・市場・経済・地縁血縁・共同体）のいずれもが、個人にとって「抑圧の主体となることもあれば、抑圧を軽減する主体になることもある」のであり、状況に応じてそれらを自由に選び直しつつ生き延びることを尊重する姿勢が示されている。

第11回に登壇した石山雄貴准教授は、東日本大震災発生後の宮城県気仙沼市南町および石巻市雄勝に調査者として赴いた経験から、当事者性の問題について考察された。地震という出来事自体は天災だが、「広域システム災害」（山下 2013）という認識に立てば、被災者も非被災者もともに、中央が周辺へとリスクを移譲するしくみの当事者であると言える。それと同時に、『震災と向き合う子どもたち 心のケアと地域づくりの記録』（新日本出版社 2018年）の著者である徳水博志氏から与えられた、「君にはわからないだろう」という言葉は、ネガティブ・ケイパビリティ（自身の了解可能な範囲に他者を容易に回収しない能力）の重要性に思い至るきっかけとなったという。こうした発想は、第12回で取り上げた夜間中学校をめぐる問題を考える上でも不可欠なものである。中学校の国語科教育や特別支援教育、母国語学級・識字教室・夜間中学校での教育に携わって来られた黒川優子氏のご講義と、ドキュメンタリー映画『こんばんはⅡ』（2019年）からは、近代的な教育制度がもたらした包摂と排除の力学の渦中で、包摂される者と排除される者との間にどのような対話や協働が必要／可能なのかを考える契機を与えられた。文字を習得し、他者が書いた文章を丁寧に読み味わい、自身の考えを署名を付して著す営みには、学ぶ喜びと表現する喜びが確かに息づいているのであり、他者の喜びを尊重するとともに自己のそれを手放さないことが、学校制度を再考する出発点となるのではないだろうか。

第13・14回では、学校教育を成り立たせる前提であると同時に、その成果として維持されるナショナルリズムと、それに起因する戦争について、正面から向き合うことを試みた。稲津秀樹准教授は、イスラエル出身で日本在住の家具作家であるダニー・ネフセタイ氏をお迎えするにあたり、パレスチナ／イスラエル問題と現代日本人の間にある“連累”（テッサ・モーリス・スズキ 2004）の関係（第一次世界大戦後の「英領パレスチナ」誕生に日本が関与した事実、第二次大戦中の日本の同盟国ドイツのホロコーストの結果としてイスラエルが建国されたこと、大戦後、アメリカはイスラエルを対中東の戦略的拠点として支援し、対アジア政策の拠点とされる日本がそれに

同調し続けていること等）について確認された。そしてダニー氏にとっての“地域”とは、生活の拠点である秩父の地図に、母国・イスラエルや敵対関係に置かれているパレスチナ、「原発とめよう秩父人」の活動の宛先である福島といった土地が織り込まれたものとしてあり、さらに世界各地に暮らすユダヤ人と互いに訪問し合うことで、平和の実現という願いをめぐり重層化している。ダニー氏との出会いを通じて、ダニー氏の地域観が稲津氏に織り込まれ、認識が変化したことについても語られた。

ダニー氏は、この度のご講義が受講生にとって、戦争や女性差別をはじめとする人権問題を自分事として考えるきっかけとなるよう、“磨き抜かれた伝え方”（マイナンバーや『Top Gun』といった、私たちの価値観を形成する物事の危険性を指摘しつつ、「ある程度の軍備は必要」という世論を誠実に論破されるなど）によって語ってくださった。もの作りの使命とは、そのものが求められ活かされるためのよい世の中を作り、次世代に手渡すことであるという、家具作家・平和主義者としての力強いメッセージは、総説Aにご登壇いただいた方々の想いとも通底するものであったと考える。（岡村知子）

Ⅲ. 「地域の知」との対話—教員の気づき

1. 「つながり」を内的・動的に捉えなおす

—変えることが残すこと

企業は、環境の変化に適応するために、組織構造や戦略を変化させる。こうした環境適応という見方は、マーケティング論や経営学においては広く普及しているが、地域社会に目を向けてみても、同様のアイデアを見つけることができる。たとえば、村田（2022）は、千葉県鴨川市にある漁村・大浦の事例において、人口移動や高齢化などの要因で衰退しようとするなかでも、その地域で生活し続けるために、人々が生活保障の仕組みを再編し続けていることを発見している。さらに、彼は、何かを維持するために、何かを変化させるというアイデアが科学哲学や落語などの多様な文脈で観察されることを指摘している。

本項では、第6回の講義で著者が紹介した久保木畳店と第7回の講師であった Masuyama-MFG の事例をもとに、「変えることが残すこと」という地域学総説Aの主題について検討する。

有限会社久保木畳店（以下、久保木畳店）は、福島県須賀川市で1740年に創業した老舗の畳屋である。畳は日本の伝統的床材であるが、市場は縮小傾向にあり、畳屋自体も減少傾向にある。そのような中で、久保木畳店はニューヨークなどの海外の都市で畳小

物製品や畳マットを販売し売上を拡大させている。さらには、2023年4月、自宅に和室のない消費者に畳をより身近に感じてもらうために、カフェ、小物ショップ、および工場を併設したTATAMI VILLAGEをオープンした。

こうした事業拡大は実は畳屋にとって稀である。なぜなら、畳屋の仕事は職人なしには成り立たない労働集約的なタスクだからである。畳は工業製品のように規格化されてはいない。畳を敷き込む際には、間取りや柱の位置によって数ミリ単位の微調整が必要となり、職人の技が欠かせない。それゆえ畳屋の商圏には職人の移動コストによる地理的制約が生まれ、その結果、典型的な多数乱戦型業界 (Porter 1985) となる。したがって、地理的に市場を拡大するという久保木畳店は畳業界の中では特異な存在であるといえるだろう。

Masuyama-MFG 株式会社 (以下、Masuyama-MFG) は、鳥取市内の新興住宅地の直ぐ傍にある小さな町工場である。1980年代の創業当初は金型製造業を営んでいたが、その後、部品加工業に転身し、自動車や医療用機器の部品を製造してきた。しかし、2019年以降、報復関税による米中貿易摩擦の激化と、Covid-19の世界的感染拡大によって、受注が激減し同社は経営危機に陥ることになる。危機に直面した同社取締役の益山氏は、宇宙産業への進出を決意し、講義では、その経緯やその時の心情が克明に語られた。

Masuyama-MFG および益山氏にとって、宇宙産業への進出には、2つの意味があった。ひとつは、従業員のモラルを高めることである。これには、同社の仕事に夢や希望を持たずに退職した従業員がいたことが背景にあるという。益山氏の父であり先代の凡生氏が急逝し、部品加工業には珍しい女性が経営者になったことも関連してか、益山氏に代替わりしてから、離職する従業員もいたという。益山氏は、こうした苦い経験をバネに従業員のモラルを高める環境づくりのために宇宙産業への進出を考えるようになる。

もうひとつはカントリーリスクの低減である。同社の主要取引先の製造業では、コスト削減のために海外に製造拠点を移すことが少なくない。Masuyama-MFG は、政治的要因や自然災害などの契約当事者にはコントロールできないことが原因で、海外での製造が停止したり、海外に拠点を移した取引先のメーカーが現地の下請け業者に部品製造を委託したりする度に経営危機に直面してきた。益山氏は、宇宙産業はその技術が軍事転用も可能になることから、国やメーカーは技術の国外流出を回避するため

に、部品の製造を国内に留めるはずであると洞察し、このことが宇宙産業への進出を後押しすることになる。

畳屋と部品加工業という異なる業界に属する二社だが、既存事業を継続しつつも異業種に参入するという事業転換を成し遂げたという点で共通している。一方の久保木畳店は、地域に根差して事業を展開するのが一般的な畳業界にあって、既存の畳事業のコスト削減に取り組みながら、地理的市場を拡大し、異業種のカフェ事業に参入している。他方のMasuyama-MFG は、かつて金型製造業から金属部品加工業へ転身し、その後宇宙産業へと進出している。

「変えることが残すこと」という地域学総説Aのテーマについて、この二社の事例から組織学習論を援用しながら検討しよう。組織学習には、探索 (exploration) と活用 (exploitation) という異なるタイプの学習がある (March 1991)。探索が新しい知識やノウハウを創造するタイプの学習であるのに対して、活用は既存の知識やノウハウを効率化するタイプの学習である。短期的利益の最大化を目指す、探索を怠り活用のみが行われるというコンピテンシー・トラップに陥ってしまい、両者のバランスをとることは難しい。経営学者は、こうした問題に対処するためのアイデアとして、ダイナミック・ケイパビリティなどの概念を導入してきた。組織が環境変化に適用するためには組織内外の資源および能力を再構築する高次の組織能力である「ダイナミック・ケイパビリティ」(Teece 2007) が必要であると指摘している。環境変化に適応するために、既存の資源や組織能力を組み替えながら新事業を創造していく二人の経営者の行動はダイナミック・ケイパビリティからよりよく解釈できるように思われる。かくして、本講義において、二人の経営者から組織内の資源や組織能力を再構築すること (「変えること」) を通じて、伝統産業ないし零細企業を残していくというプロセスを学んだように思われる。

もちろん本項で援用してきた理論群の分析単位は、組織や経営者であり、それを地域という捉えどころのない対象にまで一般化できるかは議論の余地があるだろう。しかし、本項の冒頭で指摘した通り、地域の文化や伝統も外的環境からの圧力(たとえば、人口減少や高齢化)に晒されるなかで、それを存続させるために、何かを組み替えたり変化させたりするというアイデアは参考になるかもしれない。(白石秀壽)

2. 「つながり」を対話的に捉えなおす

(1) 科学の知と地域の知の融合をめぐる

第6回の講義と第7回の三浦氏の講義では、宇宙開発を巡るトランス・サイエンスについても検討した。核物理学者のWeinberg (1972:209) は「科学に問いかけることはできるが、科学によって答えることができない諸問題」をトランス・サイエンスと呼称した。JAXA (宇宙航空研究開発機構) で固体燃料ロケットのプロジェクトに関わる三浦氏は、宇宙開発に関連する技術は軍事転用も可能であると指摘し、宇宙開発は専門家ないし科学者だけの問題ではなく皆も考えて欲しいというメッセージを投げかけた。三浦氏は、マッハ 5.0 以上の極超音速のミサイル実験を防衛省と共同で行った事例を紹介し、これは限られた予算の中で開発を進めるためには効率的であるが、こうした取り組みが社会的に正しいか否かは社会全体で議論する必要があると呼びかけたのである。

専門家だけでなく、非専門家も社会的意思決定に関わるべきであるという風潮は、何も宇宙開発に限った話ではない。たとえば小野 (2014) が検討した鳥取市庁舎整備問題は、まさに公共的意思決定といえるだろう。その大まかな経緯は次のとおりである。2010 年度末に庁舎の新築移転の基本方針が決まった後、計画の是非を問う住民投票の直接請求が行われる。そして市議会によって一度は住民投票の実施が否決されるも、結局は市庁舎整備を巡る住民投票が行われ、市民は新築移転ではなく耐震改修を選ぶことになる。しかし住民投票の後で、提示されていた耐震改修案の実現が不可能であることが判明する。その後、第三者委員会が設立され、いま耐震改修案を選んだとしても、20 年後には新築の検討が必要となり、その他の費用／便益の比較からも、新築移転案が合理的であることから、最終的には新築移転案が採用されたのであった。

三浦氏が提起した宇宙開発問題や、小野が検討した鳥取市庁舎整備問題は次の問いを提起してくれる。それはすなわち「専門的な知識を持たない素人が、専門家と意見を交わし議論するためには、どうすればいいのだろうか」という問題である。この問いは地域学の特徴の一つである超学際性 (白石ほか 2023) とも関係している。地域学総説 A・B では、研究者が創造する「科学の知」または「学問の知」と、地域の人々が実践や生活の中で培ってきた知、すなわち「実践の知」、「生活知」、または「地域の知」の対話と融合の場であり、さらに能動的に「学問の知」と「地域の知」を融合させた「わたし」という主体こそが、地域のキーパーソンなのであるという。そのために、多様な専門家を外部講師として招き、彼

／彼女らの「地域の知」に学んできた。しかし、残念ながらこれまで地域学では、知の融合の方途を検討してこなかった。専門家の話に耳を傾け、フィールドに出て五感を研ぎ澄ましさえすれば、「地域の知」を獲得でき、「わたし」の視点 (柳原 2011) から考えることを通じて、「学問の知」と「地域の知」の融合が可能になるというのでは、あまりにも素朴過ぎる。そもそも専門家と非専門家の対話や議論を成立させる条件すら検討せず、学生にその融合を委ねてきたともいえる。

専門的な知識を持たない素人が、専門家と意見を交わし議論することについては、Collins and Evans (2007) の研究が注目に値する。彼らは、科学技術の関係する社会的意思決定において正統性と拡大という2つの問題のトレードオフを検討する必要があると述べている。第1に、正統性の問題とは、科学技術の一部の分野で不信が広がりつつあるなかで、どうすれば新技術の導入を継続できるのかという問題であり、彼らは、その解決策としてパブリック・エンゲージメント、すなわち社会的意思決定に大衆の関与を拡大させるという解決策があると主張している。

第2に、拡大の問題とは、いつ、いかなる理由で、そうした意思決定に制限を課せば、専門家と素人の知識の境界を消さずに済むのだろうかという、意思決定に公衆が正当性を持って貢献できる境界設定の問題である。

この正統性と拡大という2つの問題のトレードオフに対して、Collins and Evans は貢献型専門知と対話型専門知を提唱して、その解決を試みている。対話型専門知とは、専門分野の実践についての専門知を欠いた言語についての専門知であり、貢献型専門知とは、まさにその専門分野に貢献をなすことのできる専門知である。

Collins and Evans は、相手の言っていることが分かっている人々だけが、科学技術に関わる論争の専門的な部分に貢献すべであると主張している。この主張を理解する鍵概念が対話型専門知である。地域学総説において、ゲスト講師は、ある特定分野 (たとえば、芸術、染色、経営、一式飾りなど) の貢献型専門知を有しているとみなされる。学生は、講義を通じて、その領域についての対話型専門知を獲得できたとすれば、超学際的視点を獲得することができるかもしれない。(白石秀壽)

(2) “痛覚”を研ぎ澄ますことの困難

白石の述べる専門知と地域学の関係を念頭に置きつつ、今年度の総説Aのテーマを設定するにあたり、

『地域学入門』を読み直して気がついたのは、「女性」をめぐる問題に特化した章が設けられておらず、その問題意識の欠如が、執筆者の女男比(章のレベルでは0:11,コラムまで含めると2:23)に現れていることであった。

もちろん、地域住民の約半数にあたる「女性」への言及が全く見られないわけではなく、例えば竹川俊夫は「第9章 地域がつくる福祉」の中で、市原美穂氏が代表を務める「かあさんの家」(宮崎市のNPO法人・ホームホスピス宮崎が経営)を取り上げ、次のように記している(竹川 2011:217-218)。

住宅地のなかの普通の民家であるため、「かあさんの家」のなかでは、日常生活の音や匂いが絶え間なく流れてくる。食事時には台所で調理する音と匂いがあり、登下校時には子どもたちの声。車の通る音や学校のチャイム。日常生活には普通にあるのに、病院や施設ではなかなか得られなかったものがここにはあり、住み慣れた日本家屋の空間のなかでそれらが入居者に大きな安心感を与えている。こうして入居者とスタッフが自然な形で疑似家族を形成していくのだが、他者を受け入れて共同生活するには入居者が多すぎてもいけない。

このような、自宅と施設の“あいだ”であるような「ケアつき共同住宅」が求められる背景には、「家族関係の崩壊」を経て「孤独死」に至る、中高年男性の増加があるという。この施設の名称が「とうさんの家」ではなく「かあさんの家」であることを思えば、「台所で調理する音と匂い」が入居者に想起させるのは、かつて自宅の台所で自分のために食事の支度をしてくれた母や妻の存在であり、ここで形成される「疑似家族」とは、「女性」がケアの役割を担う家庭を再現したものとも考えられる。

柳原邦光が「序章 地域を生きるために」に見られる、「「地域学」の独自性は、ひとりひとりの「生の充実」や「わたし(たち)の幸福」の実現を、換言すれば、「誰もが人として生きやすい状態」の実現を、地域という空間的な枠組みを通して考えることにある」という提言は、「誰もが」という表現の内に「女性」を含み込むことで、逆説的に、個々人の意識や社会制度に巢食うジェンダーバイアスを温存させることにつながる危険性を感じさせる。

一方、こうした問題への痛切な自覚から立ち上げられた学問領域に、地域女性史がある。折井美耶子は『地域女性史入門』(ドメス出版 2001)の中で、政治

や経済に加えて生活(身体・衛生・福祉)の視点を重視し、「痛覚」を土台として「既成の概念、既成の秩序に異議申し立てをする内容」であること、語り手と聞き手の双方が「ここを変える」気概をもって、「歴史の主体としての確立をめざす営み」である点が、地域女性史の独自性であるとしている。ふまえるべき資料として、文献資料、口承、遺物の三種類が挙げられているが、三つ目の遺物に含まれる、女性によって生み出されてきた道具や作品に着目したいと思ひ企画したのが、今年度の総説Aである。

ジェンダー化された社会構造に由来する、個々人の“痛み”の経験を広く共有することは、社会の歪みを是正していくために不可欠な営みであるが、当事者の意に反して非当事者が語りを求める(強いる)ことは、深刻な二次被害を引き起こすこととなる。総説Aの講義を組み立てる際には、予め「地域をつくる「女性」から学ぶ」というサブテーマを示した上で、6名の「女性」にご講義を依頼した。鉤括弧つきの「女性」が指し示すのは、上野淳子が整理した性別の判断基準に照らせば、「女性的」とされる特徴に合致する存在にはほかならない(上野 2016)。主として名前と見た目によって他者を「女性」と判定し、「女性」がもの作りに携わる上で、“当然経験してきたに違いない苦勞”を語って欲しいという暴力的な要請が、コーディネートを担当した稿者もまた「女性」であることで、許されるかのような甘えがあったことも事実である。

学内外の複数の講師によるオムニバス講義で、センシティブなテーマを扱うことの困難さに直面しつつも、括弧つきの「女性」に共有された生きづらさが現に存在する以上、語り手の自発性を条件としてご講義をお願いしたいと考えた。語りの自発性に通じる感情には、義務感や使命感のほかに、当事者の非当事者に対する優越感があるように思われる。特定の物事を語り継いでいくためには、非当事者が、自らの経験よりも当事者の経験により大きな価値を認める態度が不可欠であり、その態度が、当事者性を有することへの優越感を醸成し、主体的な語りが可能となる。殊に天災や人災、人権侵害を孕む出来事をめぐっては、被害者の経験とその語りは何よりも尊重されるべきものとしてある。総説Aでは、第7回にご登壇いただいた益山明子氏が、仕事で接点のある男性から「女に何ができるだ?」という言葉向けられた経験をお話し下さった。このエピソードに接して稿者が感じた胸の痛みは、「女性」から学ぶ」というテーマを一方向的に突きつけ、語りを引き出したことに対する申し訳なさ、語りの内容を自分事として

受け止めた上での、怒りの感情に起因するものであった。教室に生まれた同種の思いが益山氏に伝わったことを信じ、また益山氏が積み上げて来られた御仕事が、当の言葉の不当性を証明してあまりあるものであることを喜びたいと感じた。

このような、しかるべきものとしての優劣関係は、専門家と非専門家の間にも認められる。近代的な科学知の価値を否定することは、大学教育の崩壊と、反知性主義の蔓延にしか帰結しないからである。その上で、当事者の語りと専門家の語りの間には優劣を認めず、両者を相互補完的なものとして位置づけようとするのが、“超学際”の概念である。誰もが何らかの物事の当事者である以上、この発想は万人の対等な関係性を志向するもののようにも見えるが、事はそれほど単純ではない。アカデミズムの内部においては、学問の自由と、専門家相互の対等な関係を堅持することが大前提とされるが、この聖域はその実、国家権力による庇護や、非専門家から得られる収入（税金や授業料収入等）によって暫定的に維持されているに過ぎない。一方アカデミズムの外部には、本授業で触れた観点で言えば、ジェンダーや雇用形態、教育機会の不均等、国籍、民族性等にもとづく抑圧／被抑圧の関係が広く深く根を張っている。そして皮肉なことに、当事者の語りに内在する揺るぎない価値は、そうした現実の理不尽さにこそ由来するのであり、稿者が専門家に対しては待遇表現を用いず、当事者としてお呼びした外部講師には敬語を用いざるを得ないのは、上記のような非対称性の現れと言える。

当事者と専門家の語りに対し、非当事者・非専門家は耳を傾ける姿勢が求められるが、当然のことながら、聞き手を永遠に黙らせる権利など誰も有してはいない。総説Bで登壇されたダニー・ネフセタイ氏は、御著書『国のために死ぬのはすばらしい?』（高文研 2016年）の中で、1961年に行われたアドルフ・アイヒマンの裁判後に、当時イスラエルの外務大臣であったゴルダ・メイアが発した言葉（「私たちがされたことが明らかになった今、世界の誰一人として私たちが批判する権利はない」）を取り上げ、この発言がイスラエルの戦闘行為の免罪符として機能し続けていることを指摘している。この発言の問題点は、約600万人と言われるホロコーストの犠牲者一人一人が、今を生きる個人にとって〈他者〉である事実を隠蔽し、「私たち」（ユダヤ人・イスラエル人）という主語のもと、死者を担いで（私物化して）語っていることに尽きるだろう。「個人」を超越した枠組みで発想し行動する時、すべからず人権侵害が起こってきた歴史と現状に対し、地域学はどのように応える

ことができるのか、重き課題として考え続けていきたい。

総説Aに対する受講生の期末レポートには、「私は女だが、今まで女性だからといって差別されたことはない。そのため、あまりジェンダーの問題について考えたことはなかった。しかし、地域学総説のゲスト講師の話聞いてジェンダーについて考えていかなければならないと思った。」という、スタート地点に立ったところからの報告もあれば、「多くが男性中心で、最近になって女性が活動することが増えてきたと言うが、まだまだ一部の話であるように思った。女性側から話を聞くことが多かったが、男性側からも地域のジェンダー問題について聞くとは違った視点からの話があったのかもしれないと思った」という的を射た提言もあった。また、ちずぶる一の方々が、先代の女性たちとの対話を積み重ねることで技術を継承し、継業されたことから、女性や高齢者によって営まれてきた「井戸端会議」を想起し、「日常的な対話を男性も行う必要があると考えた」という意見も見られた。ジェンダーをめぐる問題については、学生間の認識の差が大きいので、どのようなテーマ、事例を扱う上でも必須の観点として、折に触れ言及していく必要があるだろう。

さらに今年度は、鳥取大学附属図書館のご協力を得て、登壇者にまつわる「もの（作品、製品、著作物等）」を館内に展示することも試みた。観覧者数は把握できておらず、レポート作成にあたり、参考文献がふまえていないという問題は改善していないため、講義内容はもちろん、さらなる運営上の工夫を模索していきたい。（岡村知子）

（3）「容易に理解や共感できないこと」と向き合う

岡村の述べる“痛覚”を研ぎ澄ますことの困難を再び、地域学の観点のひとつである「わたし」からの視点に引きつけて考えたい。地域学研究会が関わり2022年度開始したサイト「わたし | ワンダー WONDER」には、「なぜあなたはあなたなのですか？」や「どうして運命の出会いが『私』の前に現れるのか？」といった「わたし」の視点を大切にしている記事が並ぶ。柳原（2011）は、地域学の視点の一つとして『『わたし』からの視点』を提起し、それを「わたし」の目を通してさまざまな関係性やつながりの一つとして地域をとらえようとする視点」と説明する。また、仲野（2011）は、地域学を鍛え上げていくためのひとつの視点として、「〈わたし〉からとらえる地域学」を提示しており、これらの論考から「わたし」を見極めることが、地域学総説において重要と考えた。

一方で、総説Bのテーマは「伝えることの(不)可能性」であり、私に与えられたテーマは「わたしなりの地域の向き合い方」であった。これらのテーマを勘案し、講義を構想するにあたり、私が12年前に大学院生時代に行った被災地調査の経験から考えられたことについて話すこととした。この経験を事例に選んだ理由は、私が調査の過程で「伝えられる」ことの困難さに直面したからである。私は、学生時代、東京に住みながら、東日本大震災津波被災地の復興について、被災者へのインタビューを中心に調査を行ってきた。そのなかで例えば、涙ながらにさまざまなことを語ってくれる方、堰を切ったようにとめどなく語ってくれる方、君にはわからないだろうと言いつつもインタビューに答えて頂く方などに出会ってきた。その方々が語る「喪失の悲しみ」の語りに対し、私は記録をとりながら、語りをもとに想像を膨らませ、「喪失の悲しみ」への接近を図るのであるが、私の手元に残る調査の記録や私が想像をもとに立ち上げた「喪失の悲しみ」は、その方々が語ってくれる「喪失の悲しみ」が持つ奥行きや深さには届かない平坦な言葉に感じられた。そのため、私のために色々と言ってくれたが、語られた「喪失の悲しみ」と私のなかに立ち上げた「喪失の悲しみ」にはギャップが感じられた。また、語られた悲しみや被災後の生活の困難さに私は共感しているつもりでいるのだが、そうしたギャップがあるなかで、私は本当に共感しているのだろうかという不安も感じていた。私は調査を通して、その被災した人たちを理解したい、分かりたいと色々なことを聞いてきたのだが、どんなに聞いてもインタビューした方の一人がいうように「私にはわからない」「私にはわかっていない」のではないだろうか。そうした、私の中に横たわっていた「容易に理解や共感できないこと」について、私に伝えられたことを受け取ることの困難さを考えてみたのが、今回の講義である。

この「容易に理解や共感できないこと」と向き合うことを考えるにあたって、詩人ジョン・キーツが提唱し、文学や精神医学、教育などの分野への広がりを持つ「ネガティブ・ケイパビリティ」に着目し、講義でもこの概念について紹介をした。「ネガティブ・ケイパビリティ」は、事実や理由をせつかに求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいられる能力(帯木2017)や相手の気持ちや感情に寄り添いながらも、わかった気にならない「宙づり」の状態、つまり不確かさや疑いの中にいられる能力(小川2021)、謎(他者)を容易に「自分のわかる範囲」に回収しない能力(谷川2022)などとして定義される。

精神科医でもある帯木(2017)は、「ネガティブ・ケイパビリティ」の重要性を指摘するなかで、私たちは「さまざまな社会的状況や自然現象、病気や苦悩に、私たちがいろいろな意味づけをして「理解」し、「分かった」つもりになろうとする」と指摘する。つまり、私たちは「容易に理解や共感できないこと」に対して、いろいろな意味づけをして「理解」し、「分かった」つもりになっている可能性を持つのである。また、そこでの意味づけは、「容易に理解や共感できないこと」を自分自身の足場が揺るがないような「自分のわかる範囲」のなかに押し込め、その枠組みのなかでの限定的な「理解や共感」へと誘うものとも考えられる。そうした「理解や共感」の態度では、「自分のわかる範囲」が覆い隠し、それにより私が無自覚でいるような他者との不公正なつながりや「自分のわかる範囲」を作り出してきた私を取り巻く構造や関係性を見ることができない。さらに、それは他者を自身が「理解や共感」をした者と自分自身がみなすことによって、それ以上の「理解や共感」への追求はされず、思考停止にもつながってしまう。

そうした限定的な「理解や共感」の態度を乗り越え、他者と自己とのあいだにおける「つながり」なおしを遂行するためには、「容易に理解や共感などできないこと」に対して、安易に「理解や共感」に飛びつくのではなく、理解や共感不能として切り捨てず、その間の「宙づり」の状態の中にいる「ネガティブ・ケイパビリティ」に基づく態度が求められるだろう。「容易に理解や共感などできないこと」の自覚によって、「自分のわかる範囲」の外にあるような目を背けていた現実へと目を向け、「自分のわかる範囲」の枠組みを揺さぶっていく。その「宙づり」の状態のなかで戸惑い、おろおろしながら、それでも他者の理解や共感に向かっていくベクトルは、私を安住させてきた「自分のわかる範囲」そのものを変えていくような次なる行動や学習を生み出していく。このベクトルのなかで、私自身をいつでも変容可能なものとして開いていくことが「<わたし>からとらえる地域学」には求められるのではないかと考える。(石山雄貴)

(4)「別の未来」を示す人たちと対話し続けること

石山の述べる、他者の痛みとの対話に臨む「わたし」の「変容可能性」という論点は、「もの」というテーマに惹きつけたときに、どのように理解できるだろうか。上記以外の観点を、筆者の担当したゲスト講義を参照しながら、引き続き議論を深めたい。その補助線として、第3回ゲストの山口邦子氏の師であ

る 柚木沙弥郎氏へのインタビュー記事の引用から始めよう（柚木・林 2021:152）。

「人は何故、心を形で残そうとするのか。」
私たちの目の前に表されているものは「心」だったのだ。

2023 年度の地域学総説は、物質的な形を有する「もの」との関わりを含めた「つながり」のあり方を問い直してきた。仮に、私たちの目の前に「形」をもって表れているものが、誰かの／何かしらの意図をもった「心」であるとすれば、私たちは、誰かが／何かの意図をもって残した（伝えた）「心」との「つながり」を「もの」を介して形成していることになる。それが私たちの解放にもなれば、支配にもなりかねない意味で、心の形を有する「もの」たちとの「つながり」には大きな矛盾が孕んでいる。そして「1」にも述べた通り、この「つながり」は、近代の国民国家に代表される人為的な権力によって大きく左右されやすいと言える。

この矛盾や権力の現れるところが、制度と生活の狭間である。例えば、第 14 回のゲスト、ダニー・ネフセタイ氏の講義を振り返りたい。彼はイスラエル生まれの元兵士で、現在は埼玉県秩父市で家具工房を開いている（写真 1）。講義中、ダニーさんはこう問いかけていた。「戦闘機はものすごく複雑な機械だけれども、この機械はたった二つのことしかできない。人を殺す、物を破壊する。あとは何もできない。ゆで卵すら作れない」。にもかかわらず、なぜ、私たちは戦闘機を「かっこいい」と思ったりするのかと。

ダニーさんは、幼少期から公道や学校に置かれていた戦闘機をはじめとする軍事兵器を、当然のものとして身近に見ながら育ってきた。子どもたちをこのような養育環境に置くことが、戦争参加を通じて、モニュメントに刻まれた「国のために死ぬのはすばらしい」（それにより他国民を殺すこと、物を破壊することは免罪される）という国民国家の求める心と罪の感覚を（疑いもなく）内面化することにつながる。まさに「もの」を介して制度と生活の狭間で形成されていく共通感覚の恐ろしさを、ご自身のライフヒストリーから講義して下さったのだ。

日本に移住されてからのダニーさんは、家具職人としてご家族とともにものづくりに関わるようになった。だがすぐさま、身近な環境を取り囲んでいた軍事兵器の「もの」としての恐ろしさに気づけたわけではなかった。彼は、日本生まれのパートナーとの出会いと長年の対話を通じて、ご自身と同じ時期にイ

スラエル軍に入隊した友人・知人がパレスチナ（ガザ）の地を空爆し、子どもも含めた無辜の民の「命が奪われる残酷さ」を海外から目の当たりにすることで、イスラエル兵士としての過去と、パレスチナへの軍事攻撃を肯定してきた考えを反省するに至ったという。このときのダニーさんの心境の変化について、彼の著書から（やや長文となるが）引用してみたい（ダニー 2016:120-122）。

私は…2008 年末のガザ攻撃以前の、より規模の大きな戦争に対して反対の声をあげることはなかった。戦争の邪悪さに気がつかず、戦争が起きる理由を考えることもしなかった…実は、妻のかほるは 2006 年の第 2 次レバノン戦争からイスラエル国防軍の行動に疑問を感じて声をあげ始めたが、当時の私はまだ、イスラエルを擁護する気持ちを捨てきれずにいた…

しかし、2008 年末のガザ攻撃で、イスラエル軍が多数のパレスチナ人を殺害したとき、私の中で何かが変わった…この変化にどのようにして気づいたかは覚えていないが、子ども時代から戦争について常に言われてきたことがはたして本当なのかと、この頃から疑うようになった…

これまで、武力に走るのとは良くない、戦争ではなく外交に頼るべきだと言ってきた人たちまでが、このガザ攻撃を肯定していたのである。彼らは、イスラエル軍の攻撃による途方もない数の死者、無防備な子どもの命が奪われる残酷さに思いを寄せたり、戦争の原因を客観的に考えたりもせず、「今回は別の方法がなかった」と言い放ったのだ。

ダニーさんによる講義直前も、イスラエルからパレスチナ難民キャンプへの空爆があり（2023 年 7 月）、講義後の 10 月からはイスラム組織ハマスからイスラエルへの攻撃を契機とした、イスラエル側からガザ地区への空爆が続くこととなった。本稿脱稿時点（2024 年 1 月末）においても、両者の対話可能性は模索されるものの、暴力の応酬が収束する目処は、依然として見えていない。

今回の戦争も、それはまさに歴史的に連鎖してきた暴力と政治によってつくり出された「友／敵」の分断状況が、制度と生活の狭間に拡がった事態として捉えられる。ダニーさんは、無惨に奪われる「命」への気づきを経ること（それは戦闘機で爆撃スイッチを押す側に回っていたかもしれないという、自らの可謬性への気づきでもある）によって、人びとを友と敵に分断する戦争を生み出す政治の論理そのもの

を批判しながら、平和を訴える活動を始めることとなった。それは、これまでの自分自身への根源的批判を通じて、自らを変容へと「開く」ことである。

その際、ダニーさんたちがご夫婦で大切にされていることが、ものづくりに関わる者としての「使命」である。お二人の家具工房のパンフレットには、ものづくりに関わる者としての「使命」が「社会的責任」という言葉とともに、次のように記されている。

ものづくりとしての、アーティストとしての使命とは？それは、“人に喜んでもらうものを作る”だけでなく、“世の中を良くすること”だとも思っています。木は自然に繋がっています。自然は人に繋がっています。私たち夫婦は木のものを作りながら、社会問題や環境問題を考えています。原発に頼らない社会を目指すこと、戦争に反対の声をあげること、人がみな幸せに暮らすことのできる社会を形成すること。それは私たちの“社会的責任”でもあります。

この言葉は、まさに私たちの「心」を拘束し支配する既存の「形」に対し、人の「心」をより望ましい未来へと解放する可能性を、また別の「形」としてどのように示していくのか、という「ものづくり」の実践をめぐる課題として理解できる。自らも既存の価値観を変化させながら、支配に抗する「もの」を生産することによって、オルタナティブな価値観を発信していくことにつながる。以上、他者の痛みとの対話に臨む「わたし」の「変容可能性」という論点を、「もの」づくりとの関わりにおいて考察してきた。

この論点を、地域学の思想に引き付けて考えるときに、まずは地域学の前提と目的として書かれた、次の文章を見てみたい（柳原 2011:3）。

人は、「人として安心して幸福に生きていく」ために、何らかの関係…と場…を必要としている。このような「関係」と「場」に必要な諸条件とそれを実現する方法とを考えるのが「地域学」の役割である。つまり、「地域学」の独自性は、ひとりひとりの「生の充実」や「わたし（たち）の幸福」の実現を、換言すれば、「誰もが人として生きやすい状態」の実現を、地域という空間的な枠組みを通じて考えることである。この意味での地域は「わたし」が従属すべき絶対的な、不変の存在ではない。地域は現に在るもの（現実の地域）であると同時に、いまだ実現していない、こうであってほしいと望まれるもの（望まれる地域）でもある。地域学はこの隔たりをしっかりと認識し、これを埋める

べく、絶えず現実の地域を見つめ、再検討する。

これを踏まえると、戦争状態、もしくは戦争に至る緊張状態にある既存の地域に対し、平和状態という「望まれる地域」の実現のために「もの」を創る実践として、ダニーさんたちの営みを理解することができるだろう。このように、心と形の関係性を踏まえた、批判的な「ものづくり」論は、戦争と平和の課題を取り上げたダニーさんに限らず、他のゲストの方々を抱えている課題や実践にも通底するところが見出せるに違いない。

わたしがダニーさんに学ぶ過程で思い出したのが、筆者も翻訳者として関わった、次の人類学者の言葉である。そこには専門知を有する研究者が、「別の未来」を示す人たちと対話し続けることの重要性が記されている（Hage 2015=2022:7-8）。

「より良い世界への空想 [ファンタジー]、展望、希望、そして夢は、それらを信じる人々に元気を与えることで、生き活きとしたものになる。それらを信じる人びとを未来へと駆り立てていく。夢や展望によって駆り立てられるということは、それらが希望をあなたにもたらし、あなたの内側からあなたを後押ししていくようなあり方で、それらと関わるということだ。それが駆動力というものの、まさに意味するところなのである。今日の世界政治のほとんどで、そうした駆動力となる空想が奪われてしまっている」。「このような時代では、抑圧的な現実 (realities) に…反対する…だけに留まらないことが、研究者にとって大切である。ありうべき別の (alternative) 未来を示そうとする勢力とつながり続けるという課題が、ますます喫緊のものとなっている」。ここに述べられている「課題」は、地域学における（今後の）対話を考えるときにも、たいへん重要な示唆に富むものである。（稲津秀樹）



写真1：家具工房ナガリ屋（埼玉県秩父市）にて
（2023年6月24日著者撮影）

IV. 「地域の知」との対話—学生の気づき

本節では、講義を受けた学生たちが、「地域」および「地域学」について、どのような気づきを得ながら、自らの思索を深めたのかを紹介する。学生のレポート内容は、ゲスト講師と教員との対話を通じて、地域と自分との「つながり」を内的・動的に問い直しながら得られた気づきを、「わたし」の地域学として統合していく過程を示しているように思われる。

1. 「地域」と「自分」はどこにあるのか？

「地域」とは、行政区やコミュニティなどによって区切られた一定の範囲であり、「自分」という存在は、そのようにすでに存在する一定の範囲の中に含まれている。以前の私は「自分」と「地域」の関係をこのように捉えていた。

しかし、講義を通して「自分」がすでに存在する「地域」の中にあるのではなく、自分を中心とした延長線上に地域が広がっているのではないかと考え方が変化した。講義で登壇された講師の方たちは共通して「自分が、自分たちがどう在りたいか」ということを基準に、自分や自分たちの組織の在り方を選択していたように思えた。

ともすれば、自分のことのみを考えているようにも見えるけれども、講師の方たちは周囲にも影響を与えているのではないかと考えた。特にこのように感じた講義は、第5回の「ひらた蓬の会」の平田さんによる講義である。平田さんは、用いる道具は陶器一式が主流とされ、題材も昔話が多く用いられる平田一式飾りにおいて、あえて陶器以外の道具を使用し、当時の流行や世の中を反映させた作品を作り続けている。平田一式飾りが展示される祭りでは作品に賞が与えられるそうだが、ひらた蓬の会の作品はそこで賞を取ることができないそうだ。しかし、高橋先生とのお話の中で平田さんは賞を取ることにはこだわっていないとも言われていた。また、平田さんは自分たち以外の飾りのことを「つまらない、かわいくない、子どもが楽しくない」とも仰っていた。平田さんは自分たちの作品を受け取った誰かが楽しい、かわいく感じるように制作を行っている。また、講義中で祭りに訪れた若い人たちがひらた蓬の会の飾りのことを「すごい」と言っていたというエピソード、子どもたちが平田さんたちの飾りを眺めている写真が紹介されていた。

これらのことから、ひらた蓬の会の飾りは祭りに訪れた人に、感動や楽しみを与えていると考えられるのではないかと考える。また、平田さんはつまらない、かわいくない作品ばかりだと平田一式飾りが衰

退するのではないかともしられていた。何かはずっとあり続けるためにはそれを求めてくれる人が必要である。若い人が「すごい」と言ってくれたり、子どもが興味を持ってくれたりする作品は、潜在的に求められている作品だと考えられる。ひらた蓬の会は、楽しい、かわいく感じる作品を作りたいという思いで、一見主流とは違う作品を作るということを選択しているが、このように作られた平田さんたちの作品は、祭りに訪れた人に楽しみや感動を与えるのみならず、地域全体で平田一式飾りという伝統を守り続けることにつながっていると考えられるだろう。

では、この「ひらた蓬の会」と「地域」の関係をどのように捉えていけばいいのだろうか。すでに述べたようにひらた蓬の会の一式飾りは人びとに楽しみを与え、一式飾りという伝統を守っている。このことはひらた蓬の会以外の人びとにとっては、どのような意味を持っているのだろうか。ここからは私の想像も含むが、平田一式飾りが楽しみになることで、楽しみを与えられた人々は飾りに愛着が生まれてくるのではないだろうか。また、平田一式飾りが長く続く伝統になることでそれは地域にとって守るべき大切なものになるのではないかと。これらのことから、ひらた蓬の会で作られた一式飾りに周囲の人々は愛着を持ったり、守っていかなくてはいけないという認識を持っていたりするのではないかと私は考える。つまり、ひらた蓬の会の「こうでありたい」という思いももって制作された平田一式飾りは、ひらた蓬の会のものだけではなく、ひらた蓬の会以外の人びとのものにも変化しているといえるのではないだろうか。

以上のことを、地域学の発想を用いて考えてみる。地域学においては「自分（わたし）の視点」が重要視されている。平田さんの話を例にすると平田さんの視点から見た既存の平田一式飾りには「つまらない、衰退してしまうのではないかと」という危機意識があり、それを解決に近づけるために工夫を凝らした一式飾りを作り続けている。この新しい一式飾りが愛着や伝統という認識を周囲に与えることで、ひらた蓬の会以外の人にも影響を与えるようになった。このような流れで当事者以外の人々にも平田一式飾りについて考えるきっかけが生まれたのではないかと私は考える。つまり、平田さんが自身の中に生まれた問題を解決するための選択が、地域の人びとが平田一式飾りを自分ごととして考える機会を与えたといえる。このように考えたとき、平田さんにとっての地域とは、平田さんだけではなく、平田一式飾りに魅せられた人がいる場所すべてが地域であって、その中心にあるものは平田さんの問題意識から生まれた

平田一色飾りと言えるのではないだろうか。

以上より、地域学総説 A の講義を通して私は、自分自身の視点から現状を見つめ、その中で自身はどう在りたいかということに基づいて選択したものが、周囲に自分ごととしてとらえるきっかけを与え、それが広がった範囲が「地域」なのだと考えた。そのため「自身」が地域の中にあるというよりは、「自身」の視点の延長線上に地域は広がっていると考えるに至った。(地域創造コース所属学生)

2. 私にとっての地域学

私にとっての「地域学」とは何なのか。これまでの講義を振り返りながら、より深く考えていきたいと思う。まず今回の地域学総説 B の講義では計 3 名のゲストに来てお話をお聞きした。

最初は、生きづらさを抱えた大人と子どもたちが集まる「よだかの学校」の取り組みについて小池さんからお話を伺った。小池さんのお話からは、主に自治のための組織がどのように成り立っているのか、また、それぞれがどのように機能しているのかについて知ることができた。キーワードとしては「互いに協働し、互いに補い合っていく」という言葉が印象に残っている。行政・企業・家族の 3 領域の活動では埋められない問題領域があり、それらで受け止めきれなかった人びとのニーズに答えるために市民団体なるものがあり、領域間の補完性を担っていることが学べた。

次に、夜間中学での勤務経験のある黒川さんのお話を伺った。黒川さんのお話からは、夜間中学についてご自身の経験から様々な背景を有する生徒さんたちとのエピソードを交えながら、夜間中学がどのような場所なのかを知ることができた。夜間中学についての映画(『こんばんは 2』)や黒川さんのお話を聞く前までは、(映画中にもあるように)夜間中学に通っている人たちは、不良の子が多いという偏見があった。しかし、実際は子どもだけではなく、戦争などの理由により教育が受けられなかった人、日本語を勉強したい在日外国人など 16 歳から 80 歳代の方まで幅広い年代の生徒がいることが分かった。特に「学ぶことは生き(延び)ること」という言葉が印象に残った。「学ぶ」は、人間として当然の権利であるが、これが「生きること=生存権」にもつながっているということが分かった。

最後に、ご自身の経験から平和論を唱えるダニーさんにお話を伺った。ダニーさんのお話からは、戦争が何なのかを根本的に学べたと思う。戦争がなぜ起こるのか、何が悪いのか、何のために人は人を殺すよ

うになるのかを、ダニーさんの実体験から考えることができ、戦争を起こす国(相手)が悪いのではなく「戦争自体」が悪なのだということが分かった。講義では、ロシアとウクライナの話が例にあがっていたが、今まで私はウクライナ側に視点を置いており、ロシアが悪いとばかり考えてしまい、ロシアの平和についてはあまり考えていなかった。だが、ウクライナだけではなく、ロシアにも平和は訪れるべきであり、それを脅かす「戦争」自体が悪であり、非難する対象であるということが分かった。ダニーさんのお話のキーワードとしては、「次世代のために引き継ぐ」という言葉が印象に残った。

これら 3 名のゲストの方々の話を受けながら、改めて「地域学とは何か」という問いについて考えた。私が考える地域学とは(語弊があるかもしれないが)、専門的知識はあまり必要がない学問だと思う。確かに、ある程度の基礎知識は必要だろう。だが、例えば理工学や農学など、所属している特定の大学・学部からしか得られない知識ではなく、地域の人たちが一般的に考えている知識があると思う。

そうした知識として、地域学総説のゲストの皆さんには共通点があり、それはまさに「生活」であったと感じる。小池さんからは、「互いに協働、補完性」という言葉が、黒川さんからは、「学ぶことは生き(延び)ること」という言葉が、ダニーさんからは「次世代への継承」という言葉を聞くことができた。これらはどれも生活にかかわる言葉である。また、どれもゲスト講師の先生方の、実際の地域でのつながりを踏まえた考えであったとも感じられた。

互いに協働して補完していくことも地域のつながりの上に成り立つものであるし、夜間中学も地域の中に存在し、学びたい人たちがそこへ集いながら学んで=生きており、次世代に引き継ぐことも今まさに生きている人たちが、そのままの状態でも地域と地球を、将来の人たちに受け渡す必要があるということで、これらは単なる地域のつながりだけではなく、過去と現在と未来の、時空を超えた地域のつながりが見出すことができた。

このようにまとめると、地域学とは、地域学を学んだから考えられる、考えられないものではなく、地域学を学んだ者もそうでない地域の人たちも含めて合わさって初めてできる学問であるのではないかと思った。家中茂が述べるように、地域学とは「生活のなかから生まれる学問」であるため、「大学のなかだけで完結する学問ではなく…日々の生活のなかで人々が向かいあわざるを得ない課題への対応と、そのことを通じて人々がつながりあうプロセスそのも

のが、地域学の源泉である」という考えはそのとおりだと思った（家中 2011:85）。

地域学総説の大きなキーワードは「つながり」であると思う。家中の言葉に、上述のゲスト三名のお話をつなげて考えてみると、行政、企業、家族の三つでは埋められないものを補いながら、学びから疎外された人たちの「学びたい」という意思をかなえる、戦争を終わらせ、地球環境をこのまま維持し次世代に継承したいといった諸課題があり、これらの課題を通じてさまざまな人が関わりあい、解決に向けて「つながりあっている」ことがわかる。これこそ地域学であり、地域学という学問が講義の場で展開していたことが、最終回にまとめて分かることができた。「地域学とは何か」という問いはとても難しく、これでもまだ完全に答えきれていないと思うが、今後も以上のことを意識しながら更なる深みをめざして考えていきたいと思った。（人間形成コース所属学生）

3. 「地域学」を通して私ができること

私にとっての「地域学」とは、各人が生きやすい世界にすることを共通目標として持ちつつ、そのために何をすればいいのか、どうしたいのかの認識を共有するために、各人の納得のいく落としどころを私という視点から探究する学問である。例えば、苦しんでいる人がいるなら、その苦しみを解消するために今ある社会をどう改善したらいいのか、もしくは何か新しい制度を作るべきなのかということを考え、実行に移していくことだ。私は「地域学」をこのように実践的に認識しているが、ここで述べたことを実現することはとても難しく、さらに苦しい道であるだろう。誰かが苦しんでいることも知らないまま、興味関心を持たずに生きていくことは、とても簡単である。よって、苦しんでいる人、困っている人、辛さを抱えている人、不利益を受けている人を見つけることから、とても難しい。

地域学総説Bの講義で、夜間中学について学ぶ機会があった。夜間中学には、年齢、性別関わらず様々な人が通っていたという事実すら、私は全く知らなかった。夜間中学に興味も関心も抱いていなかった。だが、私が知らなかっただけで、そこには文字が読めない、勉強ができないことで苦しんできた人々が多くいたのだった。戦争の結果、幼少期に学校に通うことができなかった高齢の方、不登校となり学校に行けなかった人たちが意欲的に学んでいた。これらの事実を、講義される前は全く知らなかったことを恥ずかしく感じる。無関心であることは、本当に簡単なことなのだと思ってしまう。

ネガティブ・ケイパビリティという言葉についても初めて学ぶことができた。相手の気持ちに寄り添おうとしつつも、相手の気持ちになることはできないことを理解した上で、歩み寄ることをやめないことは、とても重要な姿勢だと思う。震災における被害者・当事者は、直接的な苦しみを経験しており、震災を体験していない非当事者はその経験を聞くことで、自らの感覚を近づけることしかできない。当事者が持つ当事者性は、その当事者ごとで異なっているし、ある出来事が当事者に与える影響も当事者ごとに違うだろう。震災で自分の故郷が跡形も無くなっていた人の気持ちは、その人がそれまで故郷とどう関わってどう思っていたかによって形成され、被災したときの気持ちは同じ故郷が無くなった人同士でも同じであることはないだろう。それを非当事者が理解しようとするとき、当事者が苦しみ、悲しみ、辛さを抱えていることを知りつつも、自分の理解の範疇に入れてはいけないことを覚えておかなければならない。そして、非当事者である自身には絶対に分からない当事者の気持ちがあることも理解しながら、当事者の気持ちに寄り添っていかねばならない。当事者を分かろうとする姿勢に対し、時には、「君には分からないだろう」と、残酷な現実を突きつける言葉かけられることもあるのだろう。そのような言葉に出会ったとしても、当事者を知ろうとする姿勢を持ち続けることで、ふれることが難しい当事者の気持ちに近づいていくことができるのではないだろうか。

「苦しんでいる人」がいること、そしてその人がどのような状態であるのか分かった後、何をすればいいかを考え、各人が納得のいく落としどころを見つけるということも、また難しいことである。ダニーさんの書籍タイトルにもなっている「国のために死ぬのはすばらしい？」という言葉がある。この言葉が記された碑文には元々「？」がついておらず、「国のために死ぬことはすばらしいことだ」と断定している平叙文であったという。私はそのように考えないが、この文言が存在するということが、自分が、そのように考える人がいる、もしくはそのような考えを人々が持つことを良しとする人がいるということを示している。戦死を賛美し肯定する人と、戦争自体を否定する私が話し合いを行ったとしても、意見のぶつかり合いにしかならないだろう。

このような場合にどうすることが「正解」なのか、私は自信を持って答えることができない。私は私の良識に則って戦争を否定するが、戦争を肯定する人は、戦死はすばらしいことであるという「良識」に則って行動しているにすぎない。私は他者を他者とし

て、私ではないことを認め、その価値観を認識することしかできない。しかし、戦死を良しとする価値観をおかしいと思いつながら、周囲がそうした価値観で満たされていることに苦しんでいる人に、私は寄り添えると思う。何が正しいのか、何が間違っているのかといった正義は各人で異なっていると思う。それを認めながら、苦しんでいる人がいるならば、私はその人の苦しみに寄り添って、その人が苦しみから抜け出す手伝いをできるようにになりたい。私にとって「地域学」とはそのための第一歩であるのかもしれない。(国際地域文化コース所属学生)

以上、受講生たちのなかから、「地域」あるいは「地域学」について、自らの気づきをすぐれて言語化していた論考を紹介した。転載については講義中に許可を取り、文責者が最低限の誤字脱字、言葉遣いを修正したが、文意自体に変更は加えていない。(稲津秀樹)

V. まとめにかえて

本稿は、2023年度鳥取大学地域学部地域学総説の現場で交わされた対話から、地域学の知を探究するためのヒントを探ってきた。近現代社会の変動に伴い、失われた／奪われた「つながり」を取り戻すことは、『地域学入門』にも掲げられた地域学の存在理由に直結したテーマに他ならない(柳原ほか2011)。

この「つながり」を、外的かつ静的なものではなく、内的かつ動的なものとして捉え直すとき、誰か／何かと「つながり」なおす過程で起きている「変化」をどのように認識し、考えるのか、という課題を複数のサブテーマ(もの／女性／伝える)と連動しつつ設定した上で、本年度の講義が設計された(I)(II)。

本稿の後半では、講義の場にゲスト講師が持ち込んで下さった「地域の知」との対話を通じて、上記テーマについて教員と学生がどのような気づきを得たのかを、ここまで記してきた(III)(IV)。いずれの記述も、「つながり」なおしの際に生じる、内的・動的な変化を捉えなおす上で重要なヒントを提供していると思われる。特に、(III)4で述べたように、私たちは、誰か／何かしらの意図をもって残した(伝えた)「心」の「形」に囚われている。私たちには、自分たちの「心」の軌ともなりうる既存の「形」に対し、どのような「心」の可能性を、解放に向けた別様の「形」として示せるのかが問われている。

このとき、対話的専門知をもって、「別の未来」を示す人たちと対話し続けることが、私たちに『誰も人がとして生きやすい状態』の実現に向けた変化への原動力を呼び込むこととなりうる。それがまさ

に、変えることが残すこと、という知見につながる、つながりの変化と向き合うときの構えであるだろう。

だが、(戦争状態に顕著に現れるように)他者への痛覚を研ぎ澄ますことが困難な状況において、容易に理解や共感できないことと向き合う構えが、「つながりなおし」の場には伴う。『地域学入門』にて掲げられた視点の一つ「わたしからの視点」は、専門知と生活知の統合の主体という観点からだけでなく、こうした他者理解の臨界点という困難に向き合う視点としても、鍛え直していく必要があるだろう。

学生レポートに記された気づきにも、「いま・ここ」で創られる地域学がどのように受け止められたのかが言語化されており、興味深い論点が多くあった(IV)。自らにとっての地域と自らとの関わりを、「もの」との関わりで振り返った地域の認識論を展開したのも、地域学という学問を理解しなおす際に、地域課題への対処を通じて、「つながり」なおす人びとの姿をとらえることの重要性を記したのも。さらには、どのように「苦しんでいる人」の苦しみに寄り添って、そこから抜け出すために何ができるのかと実践的な問いを投げかけた論考もあった。このように、ゲスト講師および教員の講義を通じて学生が獲得した気づきには、「つながり」をめぐる認識／学問／実践のトライアングルのなかに地域学が立ち上がっている様を確認することができる。

以上、ここまで地域学の知の生成をめぐる、地域学総説という現場にて、ゲスト講師／教員／学生の間で交わされたアイデアを記述してきた。今年度のまとめにかえて、最後に、次の国際地域文化コースの学生によるレポートの記述を引用し、筆をおきたい。

ここまで私は、これまでの講義をもとに考えたことを述べてきたが、地域学は、私たちにとって身近であること、ひいては、人と向き合う学問であるという結論に至った。その方法は、わからないことを前提に対話するというものである。講義を受ける前に考えていた「地域学」と同じく、講義を受けてから考えた「地域学」も漠然としていると感じる。しかし、この漠然としていて、それゆえ自由度が高いことが「地域学」の特徴であると考えられるようになった。自由度が高いため、誰のお話を聞くのか、誰と対話するかによって、これからは私にとっての「地域学」は変化し続けるだろう。この講義で学んだ対話の方法をもとに、様々な人と対話をし、自分にとっての「地域学」を更新し続けたい。

まさにこの学生が記すように、私たちの身近な領

域において「人」と向き合い、「地域の知」との「対話」（方法）に学んでもらうことが、この講義の眼目の1つである。「地域の知」とつながりなおす過程で、「地域学」も変化し続ける。それが、翻って地域学の核となる考え方を残していくこと、ひいては、学問自体をアップデートさせる契機へとつながるに違いない。本稿に記してきた関連教員による気づき、ひいては、学生レポートの瑞々しい気づきも含めた個別の知見たちが、「いま・ここ」から地域学をつくり続けていくときの、何かしらの手がかりとなれば幸いである。（稲津秀樹）

謝辞

2023年度「地域学総説A」および「地域学総説B」にご登壇いただいたゲスト講師の先生方に御礼申し上げます。

文献

- Anderson, Benedict (1983=1991), *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism Revised Edition*, Verso. (=1997) 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』NTT出版。
- Collins, Harry and Evans, Robert (2007), *Rethinking Expertise*, University of Chicago Press. (=2020) 奥田太郎監訳『専門知を再考する』名古屋大学出版会。
- ダニー・ネフセタイ (2016)『国のために死ぬのはすばらしい？—イスラエルから来たユダヤ人家具作家の平和論—』高文研。
- Hage, Ghassan (2015), *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*, Melbourne University Press. (=2022) 塩原良和・川端浩平・前川真裕子・稲津秀樹・高橋進之介訳『オルター・ポリテイクス—批判的人類学とラディカルな想像力—』明石書店。
- Crossick, Geoffrey, and Patrycja, Kaszynska (2016), *Understanding the Value of Arts & Culture*, The AHRC Cultural Value Project. (=2022) 中村美亜訳『芸術文化の価値とは何か』水曜社。
- 帯木蓬生 (2017)『ネガティブ・ケイパビリティ—答えの出ない事態に耐える力—』朝日新聞出版。
- 稲津秀樹 (2017)「阪神・淡路大震災を『想像し続ける』歴史実践のために—「1995年生まれ」の空間性と帰属感覚—」塩原良和・稲津秀樹編『社会的分断を越境する—他者と出会いなおす想像力—』青弓社, 253-274。
- (2019)『『魂』にふれる』ケイン樹里安・上原健太郎編『ふれる社会学』北樹出版, 120-127。
- ・村田周祐・住川英明・岡村知子・菰田レエ也・家中茂 (2022)「いま・ここで創られる地域学—2021年度鳥取大学地域学部『地域学総説』の現場から—」『地域学論集』第18巻第3号, 1-14。
- March, James G. (1991), Exploration and Exploitation in Organizational Learning, *Organization Science*, 2(1), 71-87.
- 向谷地生良・山根耕平・笹渕乃梨・植田俊幸・田中大介・稲津秀樹・菰田レエ也・呉永鎬・西浦勝之・丸祐一 (2022)「地域の当事者とは誰か—当事者研究と地域学：地域学研究大会第11回大会報告—地域課題と知のクロス」『地域学論集』第19巻第1号, 1-50。
- 村田周祐 (2022)「移動の時代におけるムラの重層的な生活保障のしくみ—宮城県七ヶ宿町湯原と千葉県鴨川い大浦の知恵に学ぶ—」『村落社会研究／日本村落研究学会』第58巻, 43-85。
- ・稲津秀樹 (2020)「いま・ここで創られる地域学—2019年度鳥取大学地域学部『地域学総説』の現場から—」『地域学論集』第16巻第2号, 1-16。
- 仲野誠 (2011)「生きられる地域のリアリティー—反省の学としての地域学を目指して—」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編 (2011)『地域学入門—〈つながり〉を取り戻す』ミネルヴァ書房, 104-125。
- 小川公子 (2021)『ケアの倫理とエンパワメント』講談社
- 小野達也 (2014)「政策選択としての鳥取市庁舎整備問題—行政・議会・市民の役割と責任—」『地域学論集』第10巻第3号, 1-31。
- 折井美耶子 (2001)『地域女性史入門』ドメス出版。
- Porter, Michael. E. (1985), *Competitive Advantage: Creating and Sustaining Superior Performance*. Free Press.
- 白石秀壽・村田周祐・稲津秀樹・岡村知子・小林勝年・岸本覚・家中茂 (2023)「いま・ここで創られる地域学—2022年度鳥取大学地域学部『地域学総説』の現場から—」『地域学論集』第19巻第3号, 117-129。
- 高橋健司 (2021)「山陰に息づく「一式飾り」の習俗(2)—島根県出雲市平田町を事例として—」『地域学論集』第17巻第13号, 29-38。
- 竹川俊夫 (2011)「地域がつくる福祉」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編 (2011)『地域学入門—〈つながり〉を取り戻す—』ミネルヴァ書房, 202-228。
- 谷川嘉浩 (2022)『スマホ時代の哲学—失われた孤独をめぐる冒険—』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- Teece, David J. (2007), Explicating Dynamic Capabilities: The Nature and Micro-foundations of (sustainable) Enterprise Performance, *Strategic Management Journal*, 28(13), 1319-1350.
- Tessa, Morris-Suzuki (2004) *The Past within Us: Media,*

- Memory, History*. Verso. (=2004) 田代泰子訳 『過去は死なない—メディア・記録・歴史—』, 岩波書店.
- 上野淳子 (2016) 「第1章 セックスとジェンダー—性別はどうして決まるのか, そして誰が決めるのか—」 青野篤子編著『アクティブラーニングで学ぶジェンダー—現代を生きるための12の実践—』 ミネルヴァ書房, 13-25.
- 山下祐介 (2013) 「東日本大震災をめぐる阪神／東京／福島—広域システム災害という視角から—」 『フォーラム現代社会学』 第12巻, 114-120.
- 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編 (2011) 『地域学入門—〈つながり〉を取り戻す—』 ミネルヴァ書房.
- 柳原邦光 (2011) 「地域を生きるために」 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編 (2011) 『地域学入門—〈つながり〉を取り戻す—』 ミネルヴァ書房, 1-10.
- 家中茂 (2011) 「生活のなかから生まれる学問—地域学への潮流—」 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編 (2011) 『地域学入門—〈つながり〉を取り戻す—』 ミネルヴァ書房, 73-100.
- 柚木沙弥郎・林綾野 (2021) 「柚木沙弥郎 心を形で残す」 來嶋路子編 『柚木沙弥郎 life・LIFE』 ブルーシープ株式会社, 152-157.
- Weinberg, Alvin M. (1972), *Science and Trans-science. Science*, 177(4045), 211-211.